

LINE を題材にした個人情報の授業実践

神奈川県立麻生総合高等学校教諭
大石 智広

1. はじめに

今回の実践報告は、LINE を題材にした個人情報の扱い方を考える授業に関するものである。LINE の是非や、LINE の扱い方を教えるものではない。LINE は、生徒が共通で理解している SNS のプラットフォームとして扱えるため、考えるための題材として授業で取り上げた。一方で、LINE や Twitter などの SNS の扱い方に関する啓蒙も必要と感じており、実際に授業を行っている。そこで、その授業の様子が最後に記述しようと思う。また、LINE がなぜこれほど支持されているのかも考察したい。

1.1 麻生総合高校の情報の授業について

本校は、今年で創立 10 周年を迎える総合高校である。今回紹介する「社会と情報」の授業は、2013 年度から開講した。1 年次の必修として開講し、30 人×8 クラスを 2 人の教員で担当し、同じ内容の授業を展開している。

2 年次以降の選択として、「情報の科学」「情報デザイン」「情報コンテンツ実習」を来年度(2014 年度)から開講する予定である。

1.2 「社会と情報」の単元計画

年間の単元計画を表 1 に示す。今回紹介する授業実践は、「個人情報とモラル」の中で実施している。

表 1 「社会と情報」年間単元計画

大単元	中単元
情報化社会と私たち	情報化社会の光と影
	個人情報とモラル
	情報とメディア
コミュニケーションとネットワーク	インターネットの仕組み
表現と伝達	表現の基本
	表計算ソフトの利用
	プレゼンテーション
情報社会と問題解決	問題解決

表 2 「個人情報とモラル」単元計画

単元名	内容
つぶやく前に	SNS などで発信する際に考えるべきことを学ぶ
個人情報をどう守るか	個人情報とその守り方を LINE を題材に学ぶ
デマに立ち向かう	デマをどのように見破るかを学ぶ

その「個人情報とモラル」の詳しい単元計画を表 2 に示す。今回、紹介させていただくのは、このうち 2 回目の「個人情報をどう守るか」である。

2. ねらい

今回、「社会と情報」に科目を変更するにあたって、改めて取り上げなければいけないと思ったのが、個人情報や情報モラルに関する項目である。しかし、個人的にはあまり情報モラルに関する授業は好きではなかった。「これはだめ」「あれはいけない」と教えることが本当に価値のある授業なのだろうかと思えてならなかったからだ(そんな don't ばかり教える教科が他にあるだろうか?)。それよりも、コンピュータを通して、今までできなかった表現ができるようになったり、より簡単にできるようになることを伝えるべきではないだろうか、と思えてならない。

しかし、一方で SNS などを「正しく」使うことも、ポジティブな意味でコンピュータを使いこなすために必要な技術であるようにも思う。

そこで、「社会と情報」の授業では、情報モラルと個人情報の単元をより充実させることとした。その際に意識したことは、建前の世界の知識ではなく、実際の社会に通用する、生きた知識を伝えたいということだ。そのことを意識して、どのような個人情報に関する授業を行おうか検討した時に浮かんだキーワードが「ビッグデータ」である。

2.1 個人情報の授業で伝えたいこと

ビッグデータという言葉が浸透し始めたが、現

代は個人の行動記録を企業が様々な形で収集して、サービスとして提供し始めている時代である。レンタルビデオ店のカードが象徴的だが、このカードはレンタル履歴に留まらず、今やあなたの購買履歴のほとんどを収集している。そのようなビッグデータの時代にあって、個人情報についてどのように教えるべきなのか、ということを経験の目的を設定するにあたって考えた。

そこでこの単元の目的を、「企業のサービスに個人情報を提供することを躊躇するようになる」と設定した。「躊躇する」という意味は、授業で「企業サービスを避ける」と教えるようなことではない。「躊躇する」という意味は、リスクとベネフィットを理性的に判断して、そのサービスを利用するかどうか決めて欲しいということだ。

人間の認識の働きには、クイック・スローの2つがあると言われている。クイックは早く動作するが、あくまで直感的で経験則に基づいて動き、間違いも多い。一方、後者のスローは、ゆっくりとしか動かないが、理性的で正しく物事を評価することができる。この授業の目的は、そのようなサービスの加入にあたって、後者の「スロー」を使って判断できるようになって欲しいという意図を込めている。

どのような材料で、そのような目的の授業をするか探していたところ、たどりついたのがLINEであった。

2.2 本校におけるLINEの利用状況

現在、本校生徒が一番利用しているSNSがLINEである。2013年度入学生対象のアンケートによると、LINEを利用すると回答した生徒の割合は80.9%となっている。Twitter 51%、mixi 30.5%に比べて、圧倒的な普及率を示している。

一方で、スマートフォンのアドレス帳をLINEのサーバにアップロードし、友達登録を自動で行う方法については、他人の個人情報をLINEに提供することになる、という解釈で批判する声もある。LINEを利用している生徒は、それを意識しないで使用していると推測し、ここを取り上げれば個人情報の扱いを考えさせられる授業ができるのでは、と考えた。80%の普及率であれば、少し補足すれば授業で取り上げるのに十分であるし、また、生徒指導上の問題等も考えると積極的に取り上げていくべきだと考

え、LINEを取り上げた授業を行うことにした。

3. 授業実践

3.1 授業展開の計画

授業展開のポイントを一言で表すなら、「コントラスト」である。授業展開を表3に示した。前半にあたるNo.1～3と、後半のNo.4～5で大きなコントラストを感じ、生徒がインパクトを感じるように授業を組み立てた。

No.1～3の前半は、いわば教科書の世界であり、正解がある世界である。ここでは、個人情報の定義とそれをどのように扱ったらいいか、生徒の常識をよく確認させる。そして後半のNo.4～5は、現実の世界であり、正解の無い世界である。前半で確認した、生徒が確信している常識を自分が破っている例を示し、個人情報を現実の世界でどう扱っていくか、改めて考えさせることにポイントがある。

準備したものは、A4両面印刷のプリントと、授業用のスライドである。

プリントの工夫としては、前半を表面、後半を裏面にきっちりわけておき、話の転換点、コントラストがはっきり意識でき、意外性を感じられるようにした。

一斉授業の部分は、スライドで説明しながら要点を書き取らせる形で進めた。個人考察は、自分で考えたことをプリントに記述させ、指名して発表させる形で進めた。

表3 授業展開計画

No.	内容	方法
1	個人情報の定義	一斉授業
2	企業の個人情報の扱い方	一斉授業
3	自分は個人情報をどう扱うか	個人考察
4	LINEの仕組みの説明	一斉授業
5	LINEにアドレス帳を送ることはやっていい？悪い？	個人考察

3.2 実際の授業展開 - 前半部分

前半では、まず、個人情報の定義や、基本4情報など基本的な知識を説明した。また、No.2の部分では、普段生徒自身が個人情報を提供している企業などは、どのように個人情報を扱わなければならないのかを説明した。具体的には、収集する目的を制限すること、知らせる必要があることなどを説明し、

第三者への提供についてどのように記載されているか注意しなければいけない、という点を強調した。

No.3では、自分の個人情報と他人の個人情報をどう扱うかを、表4に示したマトリクスに記入させ、考えさせた。

表4 個人情報の扱い方

	自分の個人情報	他人の個人情報
あなたの考え		
先生の考え		

自分自身の個人情報については「むやみに人や企業に教えない」など狙った通りの考えが多く出た。他人の個人情報については、そのままでは考えるのが難しいと思われたので「友人から別の友人のアドレスを教えると頼まれたらどうするか?」という例示をして考えさせた。この例は、後半のLINEの事例のアナロジーになるように慎重に設定している。

この質問をした結果、全てのクラスで「別の友人の許可をとる」という答えが得られ、その理由として、「他人のものなので漏らしてはいけない」という答えが返ってきた。この考えが理解できていることが、後半でコントラストを演出するために重要となるため、「面倒くさいとか思わない?」などかなりしつこく質問したが、「許可が必要」という答えがぶれることはなかった。どこまで実行しているかは別として、個人情報に関する「正しい」考え方が常識になっていることがわかった。

3.3 実際の授業展開 - 後半部分

次に、LINEのアドレス帳を集める仕組みを説明した(No.4)。「『アドレス帳を送る』ということは誰の個人情報をLINEに送っている?」と問いかけ、自分と他人の個人情報を送っていることを確認した。すぐに生徒は、自分の行動がNo.3において自分で述べた他人の個人情報の扱い方の常識と異なることに気づき、ざわざわし始めた。この演出のために、今回の授業を全て準備してきたのだが、大きなインパクトを与えることに成功したと言える。一般に、生徒には授業の見通しを示すようにと言われるが、今回のようにコントラストの演出のために、全ては示さずにおくことも、相当重要であるように考える。

生徒がインパクトを受けたところで、すかさず

LINEにアドレス帳を送ることはやっていいか・悪い、という問題提起を行い、自分で考えたことをプリントに書かせた。その時に教員の発する問題提起の仕方が重要であると考えている。効果的な問題提起は以下の通りだった。

- ・もし同じような場面が次にあったらどうするか考えよう。

- ・LINEを使ってない人の個人情報もLINEに送られるけどどう思う?

また、「自分はLINEの利用規約に同意したので良いと思う」という意見も一定数みられるので、以下の問いかけをするようにした。

- ・それはあなたの考えであって、アドレス帳にのっている他の人は同意したくないかも?

また、この問題については、先生や大人も答えを持っていないことを強調し、「実際の社会には、正解が無いことばかりだ。それでも、自分自身で判断していかなければいけない。だからしっかり考えて書いてみよう」という問いかけを行ったところ、かなり真剣に自分の考えを記載していた。

4. まとめ

4.1 生徒の反応

前半部分で確認した自分と他人の個人情報の扱いは、ともに模範解答と呼べる回答をほとんどの生徒がしており、正しい理解ができていたことがわかった。一方、ほとんどの生徒がアドレス帳をLINEに送信しているにも関わらず、他人の個人情報を送っていることを意識しておらず、授業の内容に驚いていた。生徒の反応は、主に以下のよう

- ・良い：LINEは信用できるし、便利な仕組みなので良い。

- ・悪い：やはり他人の個人情報を許可なく送信してはいけない。自分は規約に同意しても、他人は同意しているかわからない。

- ・わからない：良くないことだと思うけど、便利だし、どう考えたら良いのかわからない。

授業を通して、「身近な所で個人情報を送ってしまっていて驚いた」「アプリなどの登録を行うときは気をつけたい」「すごく考えさせられて良くわからなくなった」といった感想が寄せられた。感想から「躊躇する」という授業の目的は概ね達成できたのでは

と考えている。特に最後の「わからなくなった」という感想が出てきたことに満足している。他の回答は、直感的に答えを決めて理由を後付けしているだけの可能性があるが、「わからなくなった」という答えが出てきたということは、確かにスローなプロセスが働いていたということだと言えるからだ。次にそのような場面があった時にしっかりと考えて判断してくれるのではないかと期待している。

4.2 今後の課題

今回は1時間の授業で行ったため、最後の問題提起を個人で考えるに留まってしまった。2つの面により進める必要があると考えている。一つは深化で、グループディスカッションなどを通して考えを深め、「メリット」「ベネフィット」という考え方がより直接出てくるまで深めていきたい。もう一つは一般化で、今回考えたことをLINEだけではなく、他の企業サービスを利用する時に生かすにはどうするか、というところまで広げたい。これは、他の企業サービスにどのようなものがあるか調べさせ、どう関わったらいいと思うか、プレゼンさせることで実現できると考えている。

5. 情報モラルの授業に関する補足

5.1 「つぶやく前に」の授業について

現在、高校生がもっとも切実に必要としている情報モラルは、炎上を避けることである。自分のつぶやきによって、人生を破綻させている例を思い出すのに苦労はいらないだろう。

そのための授業「つぶやく前に」を1時間で行っている。授業のポイントは2つである。

- ・つぶやきで人生が狂うことを、事例で説明。
- ・ネットのつぶやきとリアルをつぶやき、どちらが危険か考えさせる。

後者は、「情報が広がりやすいのは」「情報が消えないのは」「誰がやったか特定されやすいのは」といった視点で、ネットとリアルを比較させ、いずれもネットであることを理解させることで、ネットでつぶやくことの危険性を考えさせている。また最後に、「どんなことならつぶやいて良いか」ということも必ず考えさせるようにしている。これは、don'tだけの授業にしない、という私のポリシーから、必ず問いかけている。

5.2 LINE そのものの指導について

最後にLINE そのものの指導について考察したい。私としては、今回の授業でLINE の利用が減ったりすることは一切意図していない。生徒にとって、生徒の8割が利用している現状では、リスクとベネフィットでは明らかにベネフィットが大きいだろう。指導する立場として、LINE に対しては大きな懸念や、特別な指導の必要性は感じていない。というのは、LINE できることは、もともとスマートフォンで（おそらくフィーチャーフォンでも）できることだからだ。メッセージを送る、複数のメンバーでメッセージを送る、通話する。もともとできないことは何もない。LINE を介した出会い系や、LINE 外しなどのいじめが報じられているが、LINE が無くても起きていたことではないだろうか。必要なことは、教員がLINE の構造を理解することと、理解しているということを生徒に伝えていくことだと思う。そうすることで、LINE は自分達だけの世界ではないと理解でき、行動に抑制がかかるのではと考えている。

一方で、ではなぜこれほどまで、LINE が支持されているのか、という疑問が残る。生徒に理由を聞くと、「電話番号やe-mailを知らなくてもやりとりできる」といった理由が聞かれた。LINE ID というLINE 中の情報だけでやりとりができるので、個人情報を守られている感覚がする(ためいろいろな人と繋がることへの抵抗が下がる)というニュアンスで、なるほどと思われた。

日本では、docomo がMMSを採用していないため、キャリア間でのメッセージ送信に制限がある状況である。そこで登場したLINE がキャリアを意識することなく、メッセージの送信を容易にしたことに普及の要因があるように私は考える。そこにLINE が、MMS という国際規格が普及している欧米ではなく、日本で誕生した意味があるように思えてならない。iPhone の販売で、docomo もMMSを採用せざるを得なくなると考えられるが、もし数年前にiPhone を販売していたら、キャリア間のメッセージ送信に障害はなくなり、恐らくLINE の誕生はなかったのではないだろうか。

参考文献

- 1)「高木浩光 @ 自宅の日記」,
<http://takagi-hiromitsu.jp/diary/>